

富山県現代俳句協会合報

第59号

令和4年12月1日発行

富山県現代俳句協会

発行人 森野 稔
編集人 河合 彰
事務局 森川 敬三
〒九三九一八四一 富山市惣在寺一三〇八
TEL 〇九〇—一六三七—〇五一八

俳句弾圧不忘の碑に寄せて

富山県現代俳句協会会長 森野 稔

長野県の上田市にある「戦没画学生慰霊美術館 無言館」の登り口に「俳句弾圧不忘の碑」があるのをご存じだろうか。

金子兜太の最後の筆跡による立派な碑が林の中にひっそりと佇む。二〇一八年に除幕したもので、戦前の新興俳句に対する弾圧事件をいつまでも記憶に残そうと全国の俳句の有志から基金を募って建立されたもので、私もささやかながら貧者の一灯を捧げた。今は平和に俳句を作っている私たちが、戦前の俳人たちの一部は命を懸けて俳句を作っていたことを忘れてはならない。当時の国家が戦意高揚を願う中で「厭戦」「反戦」の句を作り続けた俳人が次々に投獄され、俳句雑誌は廃刊に追い込まれた。この平和な日本にあって言いたいことさえ弾圧される歴史があったことを私たちは記憶に留めなければならぬ。そしてまた今も世界のどこかでそのような言いたいことがあっても声を上げられない人々が大勢いるということも忘れてはならないだろう。

碑の傍には「檻の俳句館」という小さな館があり、俳句弾圧の原因となった俳句作品が作家ごと

に展示してある。一つひとつの作品の前に佇むと平和への希求の念がこみあげてくる。

令和四年度 秋季吟行俳句大会



九月二十三日(金・祝日)、魚津市のミラージュランドにて秋季俳句大会を開催した。

本大会は、コロナ禍のため、令和元年度以来三年ぶりの開催であった。大会会場は、魚津水族館に隣接したレストハウスの二階で、目前に遊園地の見える見晴らしの良い場所であった。開催にあたり、NAPSの共催、魚津市・ミラージュランドのご協力をいただいた。時節柄、参加者全員マスク着用、検温、手指消毒を実施しての開催となった。今回は、地元NAPSの方々のご協力により、はじめてパソコン入力による清記を作成し、それはシャッフルした形で行うことができた。

参加者は会員四十三名、一人二句の投句で、投句数は八十六句。一人五句の選で午後一時一〇分開始。まず森野稔会長が開会の挨拶を述べた。

「久しぶりの吟行大会で、吟行・吟行地ならではの句が出るものと楽しみにしている」との言葉を

皮切りとして選句、披講へと進んだ。

その後、パネルディスカッションが行われた。森野稔会長、二口わこう副会長、高木昭夫副会長がパネリストとなり、森川敬三事務局長が司会進行を務めた。テーマは「吟行詠はどうあればいいか・雑詠との違いから」とし、パネリストがそれぞれ、今日の作品から特選句、注目句を取り上げ、選んだ観点、吟行詠に対する考えなどを述べた。俳句としてはいいが吟行句としてはどうか、選句は吟行句の味のするものしか選ばない、家を出た時点から吟行ではないか、類想かもしれないが吟行句としてはいいのではないか、今回は地名を詠んだ句がすくなかったが吟行では地名を入れるのもいいのではないか、などの発言がパネリストからあった。フロアからは、読みにくい漢字には披講者のためにもふりがなを付けたほうがいいのか、講者のためにもふりがなを付けたほうがいいのか、ではないか、ディスカッションではあまり突っ込んだ話が出なかった、などの意見が出された。最後に森野会長から、「今日の吟行は雨のなかでの刺激的なよい吟行会であった」とのまとめがあった。大会は高句者への表彰にいき、天・地・人位それぞれの方に賞状と賞品、九点句から四点句の方々に賞品が手渡された。最後に二口わこう副会長が閉会の言葉を述べ、拍手の中終了した。

秋季吟行俳句大会入賞作品

天位 席に昼の虫乗せ観覧車 二口わこう
地位 秋雨やビタミン色の遊園地 飛世 峰子
人位 ゆるゆると秋思を廻す観覧車 久崎富美子

【入選】

霧を脱け霧へ沈める観覧車 幹 自聲
家持の歌碑拾い読む秋の雨 坂田 直彦
秋思ともペンギン一羽下を向く 林 紀男
ペンギンを見てゐる余生秋ひと日 漁 俊久
秋霖やひっそり飼はれ傷の鮫 青木 恭子
三千の山波かくす霧の海 中 静子
回るたび秋持ちかえる観覧車 八尾とおる
秋雨の空もてあます観覧車 八尾とおる
ペンギンの手は翼とか秋楽し 沖村 幸子
秋水に群れて小魚影持たず 吉田 久夫
億年の石の集まる川は秋 林 紀男
秋霖を見詰め虚ろな木馬の瞳 大久保置箔
この津にも新宿のあり秋燕 高田 実
能登霞む有磯の海の秋時雨 中川 泰信
秋雲や海を陣取る定置網 吉田 憲子
家持碑の古文字潤す秋の雨 高木 昭夫
背高の蒲の穂揺るるピオトープ 高木 博子
山裾に雲の切れ端秋彼岸 森野 稔



地位 飛世 峰子さん
天位 二口わこうさん
人位 久崎富美子さん

作者の思い

○ 天位 二口わこう
空席に昼の虫乗せ観覧車
夕食時に「明日、吟行会に出かける」と告げると、「何時に帰るの」「四時半ごろかな」。予想はしていたが案の定、猛反対に会う。

「薄暮の運転」や「雨の日」の運転はしないと以前から家の中で話し合っていたからである。

そんなこんなで息子に送迎をして貰うことで一件落着。魚津水族館へ行くのはほぼ記憶から消えるくらい前のこと、その当時はミラージュランドなど勿論出来ていなかった。ましてや予想だにしていなかった「天位」を頂き身に余る光栄でした。帰りの車で妻から「家族の協力の賜物」と囁かれ、大いに盛り上がる。

後日、夕食をご馳走する羽目になった次第。天気は如何ともし難かったけれども、久しぶりに観覧車に乗せて頂いたことなど、当地のスタッフの皆様の御協力に感謝申し上げます。

○ 地位 飛世 峰子
秋雨やビタミン色の遊園地

俳句を始めて日も浅く、毎月四句を推敲して提出しています。これまで吟行は二度、十一名の会員で行いましたが苦手です。今回は富山県現代俳句協会の主催とはいえ、「魚津市みらパーク」ということでイメージを膨らませて参加しました。

雨の中の遊園地でしたが、子供達は大好きな遊具に集い元気に遊んでいました。子供も遊具もカラフルで明るく、大人も元気がもらえるビタミンカラーだなあと浮かんじ句です。

皆さんに評価していただいたことに感謝し、これからも俳句作りを楽しみたいと思っております。

○ 人位 久崎富美子
ゆるゆると秋思を廻す観覧車

観覧車は遊園地を代表する乗物として、子供はもちろん大人も心が引かれます。けれども遊園地から離れて住む私にとって、それはどの位置から見ようが常に遠景の中のものでした。

それだけに吟行会当日、見あげた観覧車の圧倒的な存在感に目と心を奪われてしまいました。秋空に程遠い曇天に有るか無しかの動きの観覧車。それを見つめ続けているうちに、私自身もその空席にいて空を廻っているという不思議な感覚になりました。ゆるゆると廻る観覧車は行く秋の愁い、ひいては人それぞれの思いを乗せている様に思え、印象深い景でした。

会場風景



一句選評

○ 白井 重之選

三千の山波かくす霧の海 中 静子
三千もの山波(並)というのはどの山から始まってどの山までのことを言うのだろうか。本当は実際の山々というよりも、仏教でいうところの三千大千世界を言っているのかと思った。しかし山波かくす「霧の海」だから、海上から霧に見え隠れする山々ととりたいたい。

それにしても三千もたたなわる山々を想像するとき、西方浄土の世界を思われてならない。しかし当方の思惟を超えて、霧が深くなった。

○ 八尾とおる選

三千の山波かくす霧の海 中 静子

日本で鉄道が開業してから百五十年を迎えた。幼い頃から富山地方鉄道を愛用している私であるが、早月川の鉄橋が近くなると、魚津水族館とミラージュランドにある平成三年に完成した高さ六十六mのジャンボ観覧車が見えてくる。

願いが叶って、本吟行会で一周約十五分の空の旅人となった。作者もまた秋雨の止んだひとときを楽しんだのである。標高三千mの山々が連なる北アルプスの頂上辺りが見えたが「山波」をすっぽりかくす広大な「霧の海」であった。実にユニークで余韻の深い描写である。因みに「山並」であったら駄句に終わったと思う。季語「霧の海」も印象的で利いている。幸せな吟行会であった。

○ 大久保置箔 選

億年の石の集まる川は秋 林 紀男

私が選んだ句には天地人に入賞しなかった句ばかりでした。それでも何句かは入賞しました。

自然の多い遊園地での吟行。すぐ横に流れる早月川は大伴家持も渡った日本一、二の急流の川である。剣岳より河口まで一気に流れ、川というより滝と言われて、大きな石が河口まで流れている。普通は河口の近くになると穏やかになり、舟が上り下りをするのだが、この川は別で、億年前の石がごろごろとして集まっている。何時もこの川を釣り場とし、また散歩にとよく行く。

石がごろごろしているのが川だという観念でみていた。「億年の石の集まる」とは私には新しく感じ、互選に選んだ一句であります。



NAPs代表の御挨拶

今回NAPsの方々のご協力により、パソコン入力・シャッフル・プリントアウトなど行うことが出来ました。

事務局だより

I 富山県現代俳句協会

定期総会及び春季俳句大会

一日時 令和五年三月十二日(日)

(受付開始) 一二時三〇分

(開会) 一三時

二 会場 富山県教育文化会館

一階 集会室

富山市舟橋北町七一

電話 〇七六一四四一―八六三五

三 県協会年度会費 二千元

(会場受付時にお支払いください)

四 総会議事終了後 春季俳句大会を催します。(終了予定一六時)

II 第三十一回北陸現代俳句大会

一日時 令和五年五月二十日(土)

十二時三十分

二 会場 富山県民会館 四〇一室

講演 神野紗希 現代俳句協会副幹事長

三 募集作品 未発表句 雑詠二句一組

(何組でも応募可)

四 募集締切 令和五年二月二十八日(火)

必着

五 詳細は、同封の募集要項でご確認ください。

※ 詳細は、同封の募集要項でご確認ください。



結社・句会だより

(結社誌名順)

「海原」

◇コロナ禍のため令和四年度の海原全国大会は無
く海原富山支部は通信句会を実施、継続中

「寒潮」

◇現代俳句誌 寒潮 三二二号〜三二三号発行

◇令和四年度 寒潮 総会・俳句大会

日時 十一月十日(木) 場所 呉羽ハイッ

天位 冬菜まく夫の背こぼるる夕日かな 高柳 功子

地位 秋思かな生きてこそ見る夢もあり 二口わこう

人位 やり直し効かぬ人生木の実落つ 柄沢 恭子

入選 幸せのどしりと重し今年米 平譯 宏修

式部の実なかせるほどの小糠雨 日合 英子

背伸びして光あつめて薄の穂 佐藤 美子

星月夜二上山の明満月 小谷 伝雄

「喜見城」

◇俳誌「喜見城」八七〇号〜八七五号発行

◇富山県現代俳句協会秋季吟行俳句大会入選句

ゆるゆると秋思を廻す観覧車 久崎富美子

ペンギンを見てゐる余生秋ひと日 漁 俊久

秋霖やひつそり飼はれ傷の鮫 青木 恭子

秋霖を見詰め虚ろな木馬の瞳 大久保置箔

家持碑の古文字潤す秋の雨 高木 昭夫

「峡谷」

◇峡谷創刊十九周年記念大会(通信句会)

天位 新緑は山の深さを隠しけり 木下 瞳

地位 峡谷の主張信念貫く五月 中 静子

佳作 風薫る好句あまたや峡谷誌 沖村 幸子

浜掃除終えて眺むる夏の海 鹿熊 紀子

雉一聲ひろがる静寂夕まぐれ 山本 正子

筍は足でさがせと叔父の声 吉崎 柳平

「玄鳥」

◇俳誌「玄鳥」三三一号〜三三七号発行

◇定例会(通信句会含む) 毎月第一日曜日

◇十月三十日市立公民館において短冊を展示

炎天や路面電車が浮いている 跡治 順子

浅春や地に埋葬の深き穴 河合 彰

「高志」

◇「高志」四十二周年記念俳句大会

令和四年六月二十六日 氷見市教育文化センター

参加者三十五名 不在出句十名

片肺を満たす薫風退院す 宮西 昌子

乱筆の句帳に余白薔薇の風 細野 千里

俺の茄子生で囁ってみると友 大野 康子

◇句碑建立記念俳句大会

令和四年九月二十八日 あいやまガーデン

参加者二十七名 不在出句十名

我が句碑を読んでくれたる赤蜻蛉 栃原百合子

句碑の丘この句が好きと秋の蝶 倉西 康子

身の丈の句碑に手を置く秋の丘 加藤 雅子

◇「草樹」「とやま草樹句会」

◇会報一九二号〜一九四号発行

月ごとの例会を雄峰高校県民カレッジ富山地区

センターで実施した。

廃校の噂稲穂の盛んなり 森川 敬三

梨挽くや母は延々旅自慢 亀谷 正恵

甲問の昔話にゼリー菓子 兒堂 衣代

鉛筆のキャップ転がり休暇 飯干ゆかり

廃業の湯屋の煙突秋の風 吉田 久夫

◇「岳」(北陸支部)

◇毎月第一第二水曜日の句会、及び投句会の例会

を開催。十一月の地元文化協会主催の文化祭にコー

ナー展示

「みのり俳句会」

◇定例会 月一回の例会(八月は通信句会)

参加十七名 場所は元気交流ステーション

◇みのり俳句だよりNo.20(白井重之代表)

重之の俳句鑑賞(みのり俳句会作品より)

◇令和四年度立山町民文化祭に参加。

会員一同色紙展示

日時 十月二十九日〜十月三十日

場所 立山町元気交流ステーション

◇富山県現代俳句協会秋季吟行俳句大会に於いて

入選 能登霞む有磯の海の秋時雨 中川 泰信

◇九月句会の高点句

棟上げのクレインの先の罫雲 勝守 征夫

巻き戻し出来ぬ人生秋が行く 幾島 淳隆

遙かな日稲架組み終らず一つ星 小池 弘子

「森」

◇月刊俳句誌「森」は明年三月号で通巻一五〇号

を迎える。そのために記念事業として現代俳句を

牽引された金子兜太、宇多喜代子、宮坂静生につ

いて、および「森」の源流である加藤楸邨の作家

論を掲載するために原稿依頼中。

◇主宰の森野稔が総合俳誌「俳句界」五月号の巻

頭に作品二十一句を発表するなど「俳句」「俳壇」

に作品掲載の機会が多い。「俳壇」十二月号には

「おくのほそ道・その地に遊ぶ」の特集参加、俳

句とエッセイで富山県を紹介した。

◇結社内のかたかご句会は結社の中でも伝統的な

句会のひとつ。十月二十六日の作品を紹介する。

晩秋の殺生石とフラメンコ 吉本 敏子

秋深む夫婦茶筌のまがり癖 中島 三枝

かそこそと影ゆらしおり破蓮 大倉 寿恵

行く秋の裸電球吊る廊下 平野もとみ